

浜頓別町と鶴居村の子ども体験交流会



鶴居村教育委員会
タンチョウ自然専門員

音成邦仁

2月18日、19日にKODOMO湿地交流つるい委員会の主催で、道北の浜頓別町から来村した小学生8名と、本村の小学生7名と一緒に自然体験活動をしました。遠く離れた町に住む子ども同士が交流する機会はなかなかありませんので、お互いが大いに刺激を受けたようです。

今回のテーマはオオワシとタンチョウ。浜頓別町では普通に観察できるオオワシですが、つるいっ子にとってはそれほどなじみがありません。一方、タンチョウについてはまったく逆です。遠くの木にとまるオオワシを見つけると、つるいっ子の反応は「いたいた！」と興奮気味でしたが、浜頓別町の子どもは「あ、いたね」くらいの反応でした。逆に、タンチョウを最初に見つけるのは決まってつるいっ子。浜頓別町の子どもは「どこどこ？」と慌てて探していました。当たり前と思っていた存在が、他地域の人にとっては必ずしもそうではないことが感じられたと思います。もちろん、つるいっ子にもタンチョウに関する新発見がたくさんありました。「幼鳥の翼の羽は茶色っぽい」「興奮すると頭の赤が大きくなり、何かやらかす(けんかなど)」など、たくさんの気づきを話してくれました。改めて、じっくりと観察した成果でしょう。

実は、昨年秋に浜頓別町で発信器を付けたオオワシが道東に移動してきており、道北地方で足環をつけたタンチョウが鶴見台に飛来しています。そこで、今回は発信器や足環の装着によりわかったことも説明しました。発信器のおかげで思わぬ場所にオオワシの良い餌場があるとわかったこと、足環のおかげで道北地方で子育てをするタンチョウが主に鶴居村で越冬していることなど、たくさんのがわかれると実感できたと思います。

自然体験活動に加えて、両町村の子どもが協力してゲームやクイズに挑戦する時間を作ったこともあり、子どもたちはわずか2日間(実質はほぼ1日)ながら、すっかり打ち解けたようでした。つるいっ子からは「今度は浜頓別町に行きたい」といった声も聞かれました。他町村との交流を兼ねた自然体験活動の真価を目の当たりにし、同行した大人も大満足の2日間でした。

